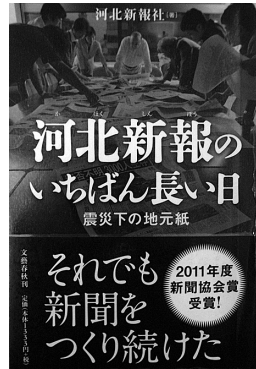


者、それから販売店までもが、地震後どのように行動したかが克明に綴られていく。

河北新報社は、地震によって組版のコンピュータが倒れて壊れてしまった。多くの販売店が津波の犠牲となり、また三陸沿岸にあった支局は壊滅した。しかし社員たちは、新聞を発行するために懸命な努力をする。そして当日夜の号外と翌日の朝刊を作り上げるのだ。一八九七年の創刊以来、休刊日をのぞいて一日も休むことのなかった河北新報は続いていく。発行された新聞は被災した人たちを励まし、大きな心の支えとなったのである。命がけで新聞を作っている人たちの気持ちと行動に感動し、教えられるものがある作品だった。



2

児童文学でも、被災地を舞台にしたノンフィクションが書かれた。

宮城県北東部の島、大島と本土の気仙沼港を往復する連絡船の船長を書いたのは、『津波をこえたひまわりさん』だ。三十九年間、連絡船の船長をやってきた菅原進は、大地震が起きた後、大島の浦の浜港にきた。津波がくることを知り、とっさに自分の連絡船「ひまわり」に飛び乗って沖に出ようとする。大島の船がみんな津波にやられてしまったら、島は孤立すると考えたからだ。向かってくる巨大な津波に向かって進んでいく。大きな波を登り、波を下り、とうとう津波をくぐり抜けることができた。そして一五時間後に、ぶじに大島の港へもどって来る。「ひまわり」は、大震災の後、大島と気仙沼港の往復を続け、人びとの貴重な足となったのだ。

このノンフィクションは、連絡船とともに生きてきた菅原を中心に、被災した大島の人びとが復興へ向かって歩み出す姿をしっかりと描いている。生きるか死ぬか、巨大な津波に向かって小さな連絡船「ひまわり」が走っていくシーンには、とても迫力に満ちている。火のついたがれきが島に流れついたために火事起き、火は島中に広がっていく。島民たちが力を合わせ、懸命に火を消そうと奮闘する姿にも感動させられる。大震災に襲われた菅原と大島の人たちが、どう闘って生き抜いたかをていねいに書いていて、貴重なノンフィクションとなった。